

ペルーの調査団に参加して

室 井 綽

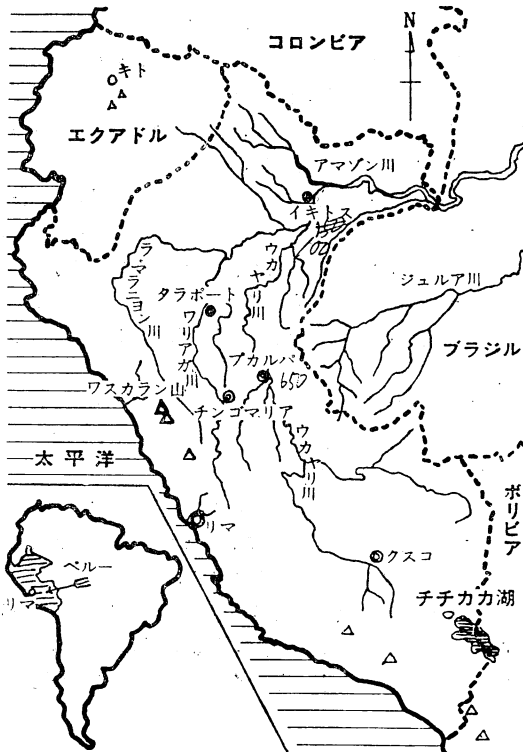
1. はじめに

わたくしは、国際協力事業団のペルー国林業開発協力基礎一次調査の専門家第1号の委嘱状をもらって昭和54年3月10日から1か月の旅に出た。

2. ペルー共和国

歴史は4過程に大別される。

- (1) プレイニカ時代、紀元前1000年から西暦600年頃まで、土器、金銀細工に優れた技術を示した。
- (2) 1200年時代は、クスコを中心に中央集権をいだく大帝国を建設した。
- (3) 1531年、ペルーに上陸したスペインのフランシスコ・ピサロは400人の軍勢の奇計によって滅亡し、王宮に侵入した兵たちは数々の財宝を奪略した。つづいてクスコへ、170人で攻撃した。侵入前にインカの貴族は多量の金銀財宝を谷間深くかくしたといわれ、それは今日も探し出すことはできない。その後、200年にわたって植民地政策を行ってきた。征服者ピサロはミイラとなり、現在、リマ市の大聖堂に横たわり、万人の目にさらされている。



- (4) 1821年、アルゼンチンを解放したサンマルチン将軍は、リマに進攻し、ペルーの独立を宣言した。独立後は、政権が安定することなく革命の連続であった。

3. リマについて

ロスから、ロッキー山脈ぞいに南下した山脈の西側は、すべて茶褐色で、草木らしいものが全然なかったが、ロッキーの東部を見ると大森林が川をはさんで展開している。さらに、リマ市に飛行機が早朝に着いたが、どこの家にも土の屏(アドベ)だけで天井がない。もちろん、市中に入り家らしい家を見ると玄関もあり、屋根もあった。

都市中には街路樹が繁茂し、雑草もあった。聞くと、自分の家の前の街路樹はその家の責任で高価な灌水をしたり、除草、支柱立てをするということであった。

4. 焼畑農業

ペルー共和国の面積は、1,285,215km²で日本の3.3倍、人口は1,700万人で1/6である。アンデス山脈以西の海岸は雨の降らない砂漠で、アンデスを越えた東部は雨期の長いことで知られている。

東部の山地は原生林で、人類がかつて斧をふるったことのない地域、多くの腐植質に富みよく肥えている。この原始林中に人類が入って農業を営むのである。

発展途上国は、どこでも山林が荒れる。山地では境が不明で山地の価格は零に近く、ある程度の社会形成が行なわれない以上、焼畑農業は続き山林の荒廃は続くのである。

5. ペルーの意外な生物関係

わたくしは出発前に、日本の3月(長日)は、ペルーの短日に当ると考え、本年は2回秋の草花の見えると楽しみにして出かけた。

ところがペルーについて、方々見ると、ナタネ・ダイコン・ムギ・コムギ・ソラマメ・エンドウがいっせいに開花しており、ソラマメ・エンドウは、実を市場に出しているのを見て驚いたことであった。

首都リマではカボック(パンヤ)が街路樹として植えられていたが1株中で一部が開花しているもの、全体の開花しているもの、あるものは落葉し、あるものは結実していた。

庭園に出て見ると、ランタナ・ダリヤ・ユリオプス・トマト・ナス・ペチユニアが花盛りであることは日本の夏と変わりはない。わたくしは日本の開花現象を思い出

し、CN率についていっそう自信がついた気がした。

庭園樹としてはナンヨウスギ（アラウカリア）が細高く伸び、大きい松傘をつけているのを見てそのスマートさに驚き、目を見張るばかりであったが、日本のように台風があればひとたまりもなく、倒れるであろう。

ペルーについた早々30キロ離れたパチャカマ遺跡を見学した。茶一色の砂漠中に、インカはアンデスから水をひいて作物をつくり、宮殿を造っていたが、その砂漠中にアナナス科のチランジア *Tillandia* sp. という20~30cmほどの高原植物が生育していた。この植物は根がなく、葉は茶褐色、高さ20~30cmになると倒れてまた伸び、高くなると倒れるという生長ぶりである。しかし、開花し、種子は発芽して行くという有様であった。この生育はガルアという濃霧が10月中~下旬にかけて発生して、葉から水分を吸収して生育するということである。それが浅い谷間に転んでいて、他に生物は何一つ見られなかった。日本のように風でもあれば、何処かへ、吹きよせられてしまうことであろう。

6. わたくしの仕事

ペルー行きのわたくしの仕事は、焼畑農業の荒廃した跡地、ことにココなどを作った跡地の雨期による土砂流失の防止ということである。

チンゴマリア（標高650m）にはココを栽培するが、いわゆる奪略農業で無肥で収穫する。この栽培地は、豪雨ごとに土砂は流失し、土質はラテライトでこれらの流れた濁流は毎日、急スピードでアマゾンに合流されていく。その豪雨ごとに道路は寸断されるので、この土砂の流失をクマザサの地下茎でくいとめようというわけである。いまこの土砂をくいとめるということが、世界の樹木の保護に貢献することになる。

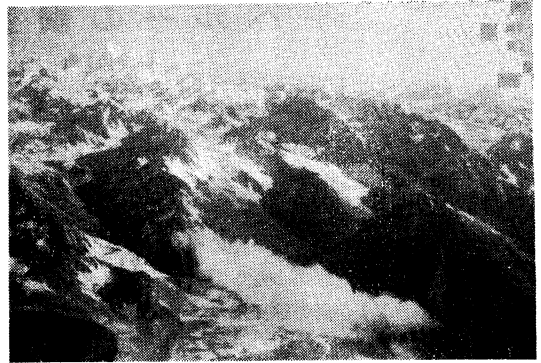
インカの当時から、山中生活をしている彼等の栽培作物は、コメ・バナナ・タピオカ・トウモロコシ・カンキツ類であり、これらは自家消費用として必要なだけ栽培し、余分に栽培するものは、ココだけであるといわれる。

しかし、都市に近い、いわゆる農家では、さまざまな作物、ことに経済性の強いもの、例えば、コショウ・コメや果実を作るし、動物では、ニワトリ・アヒル・ブタも飼われている。

作物中麻葉ココは、ご承知の通りで葉を茶のようにして飲むか、石灰と混ぜてかみ興奮剤としたが、平民は平時の使用を禁止された。戦争時のような非常時には飲んでから戦場に向かったといわれる。ココは昔も今もインフレに強く、高価に取引されている。食品外の作物で余分に作るのは本種だけである。

7. 森林

ペルーの森林資源は、きわめて有望である。樹種は2,500種以上といわれ確認樹種は600種ぐらいで、そのう



アンデスの草木のない山なみ

ち利用されているのは10%にたらないといわれる。主要樹木は *Cedera*（スギの一種）、マホガニ *Swietenia* sp., トルニロ *Cedrelinga* sp., モエナス *Aniba* spp. などである。

概して、硬い木が多い。しかし、生長の早い浮きにするようなバルサもある。

将来、アマゾン上流の樹木は、イキトス・プカルパを経て乾季に太平洋岸に出荷されることになろう。このトラックの道は、東京から山口の距離に相当する。

8. ペルーでの驚き

- (1) 文字と鉄のない国でありますから、あの瓦文化の高さに驚かされた。大きな石をくりぬいて部屋を作ったり、机、椅子、すべて一つの石から作ってある。伝説のようにUHOの力をかりたものか。
- (2) アンデス越えの水道管は何百キロか、それ以上か、すべて石で作あげた。何回かの強い地震で建造物を失いながらも水道管は崩壊しなかった。その長さといひ作りは何としても不思議である。
- (3) クスコ（3,450m）の周辺は、高木もなく、山頂まで畑を作ってインカ時代には耕作したが今日すべてが荒地で雑草が茂っているが、よく耕したものである。
- (4) リマの人口は400万という、そのうちの100万人は離職者で草もなく水もない所でよく生きていけるものである。
- (5) あの巨石の積みあげ、今日でも安全カミソリの刃1枚が隙間に入らない。何回かの地震にあいながらもこの精巧な強大さには驚く以外にない。
- (6) 首都リマは海辺で海水があるのに雨が降らずに砂漠である。それにアンデスを越えたアマゾン上流には3,000mmもの雨が降る不思議なことである。
- (7) テンゴマリア（650m）は、最高温度11月の31度C（最低19）、年平均29.7（19.1）。雨は、年間2,874mm、その間、温度差がほとんどなく、年中水泳ができる。